

# テーマ：森のアート展＜松戸市森林再開発＞

日時：10月1日～25日（土）9時～17時

場所：囲いやまの森

主催：NPO クリエイティブまつど工房、後援：松戸市

製作：CoF (Construction of the field)

代表：飯田啓輔コメント

木を見て森を見ずということわざがある。僕たち現代人はこのことわざの戒めの通りマクロな視点で物事を見る目を培ってきた。だが、それは、幾つかの木という要素を森という項目に、ある種暴力的にグループ化し、均一視し、結果的にこれをこういうものと割り切って判断をし、そして同時にミクロな視点の時には見えていた木のオリジナリティを見抜く力を失う結果になっていなだろうか？

僕たち CoF は、ある空間として見てしまう中に、確かにあるけれどマクロな視点では見えずらい場所性というオリジナリティをミクロな視点で洗い出し、それを活かした作品を展開します。

## 案内地図





➡  
この部屋の中は？



## 【空間のギャップを産出すること～「新しき場所」というテーゼ～】

森という空間はしばしば、人知を超越し圧倒する自然の形象として神秘化されてきた。だが同時にそこでは、「自然」と「人工」という二つの伝統的カテゴリーを調停し、「自然と意志を通じ合わせる」という課題を神話的に解決しようとする（人知の及ぶ範囲内に囲い込む）欲望が働いている（たとえば「もののけ姫」のディダラボッチは、人型として表象される）。

見たところ、森に彫刻を配置するという CoF の手続きには、まだ手のつけられていない辺境を「新しき場所」として開発するという森林ユートピア的な願望が伏在しているが、そのような空間への幻想は、彫刻という存在と分離することはできないだろう。たとえば本田仁平の作品群に際立つのは、所与の空間を穿つように何か「別の」作動域、あるいは環境系を「囲い込む」企みである。巣のなかに優しく「匿われた」卵の形象を呼び覚ます近作すら、こうした系譜に連なっている。森洋樹もまた一定の空間を枠付けるが、それはしばしば「現存する空間への裂開」として行われ、別の空間へと変革される契機がこの空間にすでに内在していることを教えているようだ。そして成田輝の制作履歴においてとりわけ、ここでの議論に示唆を与えるのは、博物標本と人工的に研磨された艶めく宝飾品の性格とを併せもつオブジェである。そこには、博物学とその空間的形像としての博物館によって代表される、自然を知によって一覧化し囲い込もうとする願望が、微候的に結晶化されている。しかしディダラボッチが、人工的な領土（産業区域としてのタタラ場）をたやすく荒廃させるゼリー状の濁流にも変貌してしまうように、囲い込まれた空間とは永続的な安全地帯ではありえない。この空間相互における抵抗関係の解消不可能性はしかし、複数の知覚的要素を組み合わせ、それらの間の抵抗関係を痕跡化する造形行為においては、むしろ強みとなる。それは原理的に、互いに分離され独立したシステムをキメラ的に組み合わせる（たとえば、形やサイズが異なる松かさをコップ状の容器で匿い、連合／衝突させる飯田啓輔の近作にも見受けられる）ことで、それら相互の複雑なせめぎ合いから「別の空間」を生成させる潜在力を証拠づける、小規模な比喩的モデルの生産なのだ。〈勝俣涼＝文 美術批評〉